仙台市教育委員会「スタートカリキュラム検討委員会」第１回会合（'09.6.4.）資料

ミニ講演　幼児教育と小学校教育をつなぐものとしての生活科
～生活科がスタートカリキュラムの中核を担う必然性～

上越教育大学大学院　　木 村　吉 彦

Ⅰ　スタートカリキュラムとは

（『指導要領解説　生活偏』pp.43 ～ 45.をもとに）

生活科は、教科の性格上、国語・音楽・図工など、他教科等との関連が深い。その指導に当たっては、低学年教育全体を視野に入れて、他教科等との関連を図りながら進めていくことが求められる。学習指導要領第１章総則第４の１の(4)でも、「児童の実態等を考慮し、指導の効果を高めるため、合科的・関連的な指導を進めること」と書かれている。

今改訂において、「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」の中に、「特に、第１学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」が付加され、この文言を基に『解説』「第４章 指導計画作成上の配慮事項」の(3)に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活への適応を促し、小１プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示された。

以上のような、スタートカリキュラム作成の必要性を確認した上で、『解説』を基にしながら、それぞれのキーワードについての木村なりの定義付けを行う。合科的な指導と関連的な指導との区別については、『解説』の文言だけでは説明がしにくいため、木村の思いきった見解を以下に書き出したい。尚、この『解説』における「合科的な指導」と「関連的な指導」の定義は、平成 11 年 5 月発行の『小学校学習指導要領解説　総則編』（p.71.）より引用したものである。

1．スタートカリキュラムとは

新入児童の入学直後約１ヶ月間において、児童が幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのこと。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、児童に「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらしてくれるであろう。

2．合科的な指導とは

学習のねらいを、抽象度の高い「方向目標」（語句説明は後述）を定め、その目標を達成するために、遊び的要素の強い活動や教科にも連動するような活動を取り入れ、児童の登校意欲や学習意欲を高めるような指導プログラムのこと。例えば、「がっこうだいすき」という単元名にした場合、目標を「学校が大好きになり、明日も学校に来たいと思える子ども」を育てることと設定する。実際の活動の中には、例えば、学校探検（生活科）・自己紹介（国語）・友だち何人できたかな（算数）・みんなで校歌を歌おう（音楽）・自画像で自己紹介（図工）などを取り入れ、やがて様々な教科学習に結びつく活動を遊びながら展開していくことが考えられる。入学当初に行われるスタートカリキュラムは、学習のねらいが先にある合科的指導が相応しいと考える。

3．関連的な指導とは

ある一つの教科の目標を中心に据え、その目標を達成するために他教科の活動を取り入れて行う学習活動プログラムのこと。例えば、生活科でアサガオ栽培に取り組み、「ぼく・わたしのアサガオをみんなで育てよう」という目標を設定したとする。アサガオに

愛着を持たせるために、学習カードに絵や作文をかく活動（図工・国語)、アサガオの花の数を数える活動（算数)、アサガオのつるでリースを作る活動（このとき、まだ緑が残っているので切りたくないという子が出る→命の問題＝道徳）などを、関連させることで生活科の目標をより確実に達成することが可能となる。これは、低学年教育全体として、取り入れたい学習スタイルであると考える。「**題材は生活で、表現は他教科で。**」

Ⅱ　幼児教育から小学校教育へ

次に、幼児教育と小学校教育の違いを教育の「目的論」「方法論」「評価論」から明らかにする。そして、両方の性格を併せ持った教科としての生活科の特徴を述べ、なぜ生活科が幼児教育と小学校教育をつなぐものと言えるのかを明らかにし、さらには、生活科がスタートカリキュラムの中核を担う教科として本当に相応しいのかを考えたい。

☆**幼小の接続とは、**

幼児教育＝遊び中心の生活から、小学校教育＝（教科）学習中心の生活への移行。
どちらも「学び」（子どもが様々な資質・能力を身に付けて育つ姿）は共通している。

１　幼児教育における遊びの中の「学び」（『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』）より）

(1)教育の目的：方向目標（一般目標、とも言う）中心

方向目標：子どもの育ち（「学び」と言い換えてもよい）の方向性を示す教育目標

例）『要領』『指針』のねらいの実例（「～＋ことのできる子ども」＝**めざす子ども像**）

領域「健康」ねらい(1)明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。（心情）
(2)自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。（意欲）
(3)健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。（態度）

(2) 教育の方法：環境を通して行う教育・保育（活動や体験を通して～、と類似の言い方）

間接教育：教育のねらいや目標を学習(保育)環境に反映させることによって、学習者（子ども）の主体的な活動を誘発しようとする教育の方法、のこと。

(3)教育の評価：他児と比べることは一切ない。

個人内評価：子どものかつての姿と今の姿を比べて、どういう方向に育っているのかを確かめながら行う子ども理解の方法。「伸びを認めて褒め、自己肯定感を蓄積させる」評価法。子どもを全人的に捉えながら行う保育・教育にとって大変重要な評価の在り方である。（「指導要録」もあり）

徹底した絶対評価

２ 小学校教育における学習の中の「学び」…学習内容はあらかじめ決められている

(1)教育の目的：（生活科以外は）到達目標中心

例）『学習指導要領』の各教科の目標と内容

算数［第１学年］目標(1)…数の意味や表し方について理解できるようにするともに、加法及び減法の意味について理解し、それらの計算の仕方を考え、用いることができるようにする。⇒**実際は計算力育成**をめざす。

内容　A　数と計算　B　量と測定　C　図形

※方向目標と到達目標を対立的に捉えてはいけない。方向目標 ⊃ 到達目標 と考えた方がよい。また、どちらがよくて、悪くて、の問題ではない。

国・算にも「方向目標」はある。＜例）日本語のおもしろさが分かる。論理的なものの考え方ができる等。＞

(2) 教育の方法：教科書中心であるため、直接教育 中心

(3)教育の評価：（「指導要録」への記載）評価規準を設定し、最終的にはＡ・Ｂ・Ｃによ

る評価。３年生以上に「評定」欄あり（相対評価）。

３　幼児教育と小学校教育をつなぐ（両方の性格を併せ持つ）ものとしての生活科

(1)教育の目的

・究極的な目標：自立への基礎を養う（方向目標）

ただし、個々の単元や個々の児童に対しては、自立にとって必要な資質・能力を、具体的な「到達目標」として設定することは可能であるし、全く問題ない。例）この単元を通して太郎君には「人前で堂々と発表できるように指導しよう」という（到達）目標を設定して活動に取り組もう。

方向目標 ⊃ 到達目標＜到達目標を内に含んだ方向目標＞ ＝教育目標の構造化

(2) 教育の方法：間接教育が原則。適宜、直接教育も取り入れる

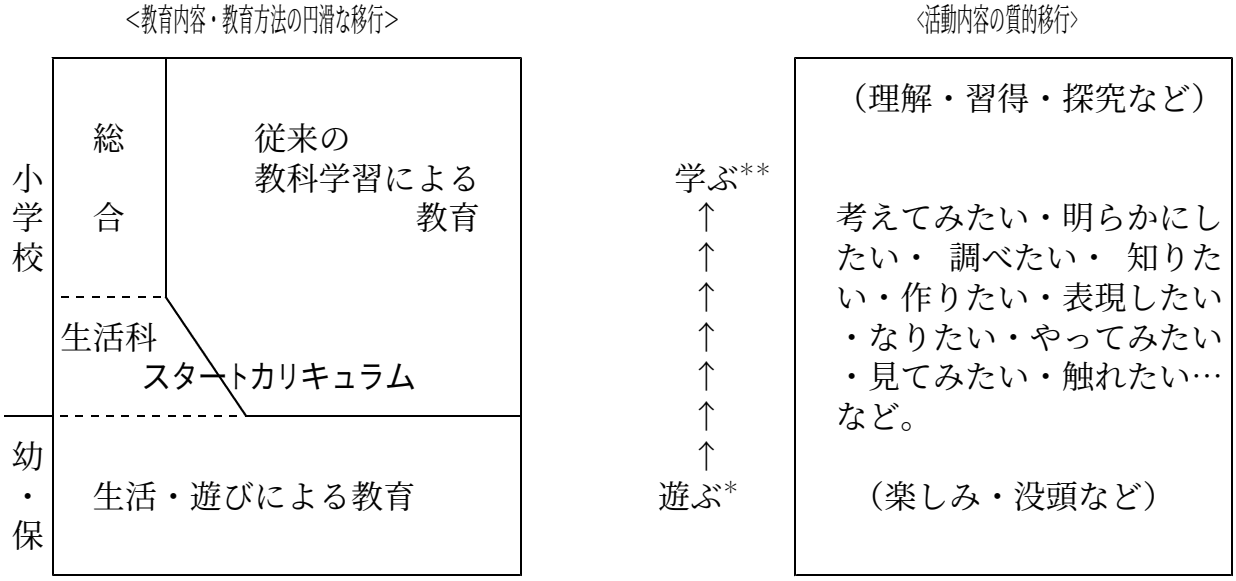
「教え込み」「指示・命令」は極力控える。＜例）秋を見つけるために、児童を公園へ連れて行く（間接教育）。＞ 教室に戻り、学習シートを書（描）く（直接教育）。

※やはりここでも、どちらが「よい・悪い」の問題ではない。

(3)教育の評価:評価規準（A・B・Cによる評価）を前提とした個人内評価 （相対評価なし）

「伸び」を認めて褒めてあげる。「いいとこ見つけ」が生活科評価の原則。自己肯定感・自己実現を目指す（→生きる自信＝自立への基礎づくり⇒「生きる力」育成の切り札）

４　両者（幼児教育と小学校教育）の関係とスタートカリキュラムの位置を図示。



（布谷光俊「幼・小の接続，発展と生活科」＜『信州大学教育学部紀要 第 76 号』'92 ＞をもとに）

＊＊学ぶ：学習活動を通して、意識的・意図的に知識・技能や資質・能力を身に付ける。

＊遊ぶ：遊びや生活のなかで、無意識のうちに知識・技能や資質・能力を身に付ける。（教師・保育者はいずれの場合も意図的）

☆なぜ、生活科が幼児教育と小学校教育をつなぐ役割を果たせるのか、おわかりいただけたでしょうか。また、生活科の持つ教科目標の抽象度の高さと学習の自由度の大きさが、生活科を中核とした合科的な指導（抽象度の高いねらいを大切にし、学習の大枠は教師が決めるが具体的な活動内容は子どもが決める）をより効果的にするのです。